

海外生活 エッセー

パリ事務所

パリの賃貸事情 —パリ大会の裏で—

(一財)自治体国際化協会パリ事務所 所長補佐 柳澤 仁実 (福井市派遣)

パリ赴任者にとって、最初の難関は住まい探しだ。言語や価格もさることながら、パリが世界的な観光地であるという事情によって住まい探しの難易度はとても高い。

→ 観光客が増えると住宅が不足する

パリらしい景観を保つための建築規制や、近年導入された環境負荷の高い住宅の賃貸を制限する規制により住宅戸数が増えにくいパリでは、いわゆる「民泊」が住宅難に拍車をかけている。とりわけ赴任者が望む家具付き物件は観光客向けの短期貸しと競合しやすい。今年は特にオリンピック需要を狙って、空物件を民泊として登録する大家が増えたという。実際、7月に民泊仲介事業者が公表したところによると、パリ地域で予約可能な宿泊施設が前年比で40%増加したという。

→ パリの住まい探しは長期戦

長期の賃貸物件を探す場合、フランスにも、日本であるような物件検索サイトがあり、賃料や設備などの条件を選択して希望に合う物件を見つけることができる。気に入った物件のページから自分の連絡先などを送信すると、物件を掲載した事業者や大家から連絡が来る仕組みだ。それでも物件探しが一筋縄でいかないのは、物件不足のために、1つの物件に複数の申し込みがあるのは当たり前、その上、「釣り物件」(別の物件を案内するための広告用物件)や詐欺が紛れているためである。

実際、私の場合、内見予約を取るのも苦労した。最初に申し込んだ物件は、その日の午後に売約済みと連絡がきた。その後も全く連絡がなかったり、連絡が来ても別の物件を案内されたりすることもあった。また、何とか内見にこぎつけて行ってみると、他の入居希望者と一緒ということもあった。驚きだったのは、まだ前の住人が住んでいるところを内見したこともあった。条件を変え

つつ10件以上の内見申し込みをして、実際に内見できたのは3件だった。しかも、うち1件は入居可能日が2カ月以上先で、別の1件は書類審査で入居できないと連絡があった。結局、1カ月近くかかって最後の残った1つになんとか入居が決まったのだった。そんな中でも不幸中の幸いだったのは、フランス人の大家さんがとてもよくしてくれて、電気契約の手助けや子どものためにおもちゃをくれるなど、いろいろな面でサポートしてくれたことだった。



住まい探し中の宿泊先も民泊だった

外国人に限らず、物件探しの苦労はパリでは日常のようだ。現地職員の話では、大学の新学期前には、安価なアパートの大家の家の前に書類提出の行列ができるという。また、パリ事務所の先輩からは、内見予約した物件を、内見せずに決めた人に取られてしまったという話を聞いた。一方で、内見しない人を狙った架空物件詐欺なども頻発しており、大使館でも注意喚起をしている。また、オリンピック期間中に貸し出すため安価なアパートを追い出されたという記事も目にした。

観光大国フランスから先進事例を学びたいと赴任したが、思いがけず観光大国の最新の課題を、身をもって知ることになった。日本の自治体が今抱える課題の解決策だけでなく、今後直面しうる課題と対応策にも目を向けられるように、この赴任の機会を生かしていきたい。